



とりあえず、俺は乗客の手当の手伝いを続けることにしたのだが、それは長くは続かなかつた。一瞬、目の前が真っ白になったような感覚に襲われたあと、気がつくとも機内の照明がすべて消えて、非常灯のみになっている。どうやらアウトバンドもやられたらしい。次の瞬間、身体が落下するような感覚に襲われた。人工重力が切れて自由落下状態になったようである。セーフモードに入るのなら事前にアナウンスがあるはずだが、これは明らかに意図的なセーフモードとは違う。機内の保護機構が働いて強制的にセーフモードに移行したのだろう。だとすれば、何か深刻な問題がこの機体に起きている可能性が高い。

「中井ケンジ、生きてたら操縦室まで来なさい、今すぐに！」

これは、インターフェイス経由ではない、オーディオのアナウンス、そして美月の声だ。俺は、無重力状態の機内で悪戦苦闘しながら、どうにか操縦室にたどり着く。そしてそこで見たのは、ぐったりとした機長と、副操縦士席に座った美月だった。

「機長が、さっきの磁気嵐でやられちゃったのよ。副操縦士が先にやられちゃってて私が呼ばれたんだけど。あんた、かわりにそこに座って。早く」

おいおい、機長がやられたって、どういう事だ。俺が代わりに座って何ができる。

「バカ、何してんのよ、早く！」

美月が叫ぶ。俺は、意識のない機長をそっと、後ろの補助席に移してベルトで固定し、機長席に座る。

「あんた、VPIは使えるわよね。接続して。すぐに！」

なんだって、俺に操縦しろってのか？ そんなこと出来るわけがなからう。

「全部私がやるわ、だからバックアップして。早く」

バックアップだったって、いったい何をすれば……。この磁気嵐の中ではD Iユニットは使えない。ケンジは、操縦席の脇にあるアウトバンド用のグラスをかけた。これは、視覚、聴覚のアウトバンドを最大限に使ってV P Iにインターフェイスするための装置だが、あくまでD Iが使えない場合の非常用である。当然、ビットレートつまり情報の伝達速度はD Iに比べて低いので反応はよくない。だが今、D Iを使うのは命取りだ。次にまた磁気嵐が来たら、それこそ一巻の終わりである。グラスをかけるとすぐにオートチューニングモードが作動する。アウトバンドの帯域特性は人によって差がある。このシステムは、自動的に最適な帯域を探してインターフェイスするのである。ただ、通信できる情報量に制限があるので、D Iで利用できるサラウンドビューが使えない。

このサラウンドビューというのは、機外の映像や各種のセンサーからの情報を直接意識に投影するものだ。目を閉じた状態で、機外のすべての映像と、必要なパラメータを見る事が出来る。不思議に思うかもしれないが、背後の景色も同時に見える。もともと人間の脳内には目に見えない範囲も含めてのマップが存在する。だから、背後の気配を感じたり、手探りで物をつかんざりできるわけだが、サラウンドビューでは、その脳内マップの全域に映像を投影するため、自分が空中に浮いて、すべての方向が見えているような感覚になれるのである。この感覚は、自分が鳥、いや神様にでもなったような不思議な感覚である。だが、残念ながら今回はそれが使えないので、外部映像はモニターと視覚にたよるしかない。意識に投影されるのは、映像化された計器と操作パネルだけである。ちょうど昔風のヘッドアップディスプレイみたいな感じだ。

次の瞬間、俺の目の前に宇宙機の操縦に必要なパラメータが表示された。表示はさながらネオンサインのように、赤や黄色に点滅している。つまり、それだけ異常があるという事である。これまでT S 5型機のV P Iシミュレーターでは何度か遊んだ事はあるが、実機はもちろんこれが初めてである。しかも、この緊急事態下でだ。俺は計器をひととおり見渡して愕然とした。オートパイロットが死んでいる。こいつをマニュアルで飛ばそうってのか、いくらなんでもそれは無理だ。

「計器は読めるのよね。軌道パラメータを見て」

「おい、無茶だ。こいつをマニュアルで飛ばすなんて」

「無茶もなにも、やらなきゃ墜落よ。さっきから高度がどんどん下がってる。今、エンジンを再起動してるから」

こいつは本当にやる気だ。しかし……。俺はもう一度計器に目をやる。エンジンの燃料ゲ

ージはもう半分を切っている。この量だと、数分でガス欠だ。そもそもこの機体のエンジンは補助動力としての役割しかない。軌道間の移動は加速ステーションだよりなのだ。

「ケンジ、乗客に身体を固定するように言って」

俺は言われるままに、機内アナウンスをかける。しかし、この状況下で何人がそれに従えるだろう。

「いくわよ、エンジン点火」

「待て、美月、傾斜角がきつすぎ・・・」

いきなりガクツと衝撃があつて、身体がシートに押しつけられる。

「美月、機首を上げろ、まともに大気圏に突っ込むぞ！」

「わかってる、今やってるのよ・・・」

まさに死ぬか生きるか、一生に一度かもしれない大事件が起きようとしていた。



俺もTS5型のシミュレータで一度マニュアル操縦を試した事がある。結果は5分で墜落だ。大気圏を飛行する飛行機ならば翼の揚力で機体を制御できる。翼は設計上、機体が安定するようにならされているから操縦は比較的容易だ。だが、宇宙機は違う。機体の姿勢はすべて微調整用の小型エンジン、いわゆるスラスターで制御される。機体に十数個もあるスラスターを同時に操作して最適な姿勢を保たなければならないのだ。それを一人でやるなんて、熟練したパイロットでも大変な仕事である。それが証拠に、目の前の姿勢パラメータは、めまぐるしく変化し、危険を示すアラームが出続けている。

「だめだ、今度は機首が上がりすぎだ。5度下げろ。左に3度主軸がずれてる、右に4度ロールだ」

「わかってる、全部わかってるのよ、でもうまく・・・動かない」

そういえば、こいつは余計なインターフェイスをいっぱい持っているとってたな。もし、それが全部繋がってるとしたら、情報を処理しきれないだろう。普通は機長と副操縦士が分担す

る作業を全部一人でやっている上に、全情報が流れ込んでいるとしたら、とうてい処理はできない。おまけに、大きなプレッシャーもかかっている。いわゆるグラスコックピット症候群シンドロームにおあつらえ向きの状況じゃないか。このままじゃこいつはパニックを起こしてしまう。

「美月、姿勢制御を半分こつちによこせ。一人じゃ無理だ！」

「何言ってるのよ、出来るわ、大丈夫……」

「なわけないだろ、ピッチとロールをこつちに回せ、早く！」

ピツ、と軽い音がして、と言ってもインターフェイスが作り出す仮想現実音なのだが、計器表示のいくつかが薄い黄色からグリーンに変わった。コントロールモードに切り替わったわけだ。これで、上下角と回転はこつちで制御できる。

「よし。あとは、情報共有モードにしてくれ」

情報共有モードとは、複数の人間が仮想感覚情報を共有して同じ作業をする場合に使われる。VUで行われるゲームの多くもパーティーを組んだ仲間同士がこのモードを使って敵チームと対戦したりするわけだ。こういうきわどいシチュエーションでは、このモードのほうがやりやすい。

「わかったわ、こつちのデータは多いから気をつけて」

また、ピツと音がして今度は表示全体が薄いブルーに変わる。共有モードになったわけだが、その瞬間、流れ込んでくる情報量が一気に増えた。まるで視野全体が計器板になったような感じだ。こいつは、この状態で操縦していたのか。

俺が一瞬情報に圧倒されかけた時、奇妙な感覚がした。それは、俺が時折ゲームで感じるあの感覚だ。その瞬間、目の前のすべての情報が綺麗に整理された。そして、不要な情報はどんどん消去されていく。いや、それは自分の意志だ。今必要な情報は何か、俺にはすべてわかっていた。

「え、あんた、これって……」

美月は明らかにとまどっている。だが、今はそれどころではない。

「美月、エンジンを一旦絞れ。このままじゃ燃料が持たない」

「わかったわ。エンジン、アイドリング」

この感覚だ。いつもゲームで、それから試験の時も感じた感覚。神経がとぎすまされ、必要な情報がすべて自分の経験のように流れ込んでくる。だが、同時に深刻な状況もすべて理解してきた。今の高度から元の軌道に戻すには、もう燃料が足りないのだ。どうする。

「燃料、足りないわね。不時着するしかないかな」

「いや、速度が出すぎている。このまま大気圏の下層まで突っ込んだら燃え尽きるぞ」

「それじゃ、どうするのよ？」

それは俺が聞きたい。だが、考えている間に時間は過ぎていく。なにか行動しなければ・・・機体の外部はそろそろ大気圏の外層に触れて、熱を帯び始めている。時間が無い。

「あ、あれ、何だろ」

美月がその意識を向けた方向に地上から宇宙に延びる放射状のチューブのようなものが見える。もちろんこれは実際に目に見えるものではなく、宇宙機のナビゲーションマップが投影されたものだ。

「指向性磁場か。南米のアタカマスペースポートだな。いちかばちかやってみるしかないか」

「どうするつもりよ？」

「あれをもう一度宇宙に戻るために使わせてもらおうのさ」

「冗談でしょ。そんな事出来るはずが・・・」

いや、出来なきや丸焦げになるしかないのは、美月だってわかっているはずだ。

「アタカマポートコントロール、こちらシャトル34便、緊急事態を宣言する」

「シャトル34便、緊急事態了解した。こちらアタカマデパーチャコントロール。状況を教えてくれ」

「こちら34便、当機は磁気嵐に遭遇、パイロットが操縦不能に陥ったため、乗客のVPI保持者2名が操縦している。オートパイロットは停止中。軌道に戻る燃料はなく、速度も高すぎて着陸は不可能だ。いちかばちかだが、そちらの指向性磁場に乗って軌道まで加速したい」

「34便、状況はわかったが、それは無茶だ。ほんの少し進路がずれただけで、墜落か、軌道の外に飛ばされてしまうぞ」

「だが、それをやるしか助かる方法はない。なんとかお願いしたい」

「了解した。磁場の射出角度を最大限低くして射出軌道に乗りやすくする。あとはそちらの幸運を祈る。こちらのガイドマップ情報を受信できるか？」

「こちら34便、マップは受信可能だが、オートパイロットが使えない。ないよりはマシという程度だが、送ってもらえれば助かる」

「了解した、マップには非常用チャンネルで接続可能だ」

視野の中に指向性磁場に乗るための最適軌道が表示される、それに対する偏差と修正パラメータが指示されている。本来ならばこの情報はオートパイロットが受信して自動制御で軌道に乗せてくれるのだが、今は、それを自分でやらなければならないわけだ。

「美月、セーフモードを一部解除してシートホールドを一時的に生かせないか。軌道制御がかなり荒つぽくなるから乗客が心配だ」

「わかった、やってみる」

さて、問題はここからだ。既に大気圏の上層で僅かながら空気抵抗があるから、この宇宙機の小さな翼でも、多少のコントロールは出来る。俺が受け持っている上下角とロールの制御だけでもある程度軌道を維持できるはずだ。エンジンは最後の段階で使おう。

「ホールド作動したわ。これからどうするの」

「軌道の偏差を見てくれ。ピッチとロールだけである程度合わせていくから、微調整はそっちでたのむ。エンジンは最後のタイミングまで使うなよ」

「わかったわ。まかせなさい」

しかし、反応がいまいちだ。やはりアウトバンドでこんな操縦をやるのは無理があるのか…。

「ケンジ、手を出して」

「なんだ、いきなり」

「いいから早くー！」

俺が出した右手を美月が左手で握る。その瞬間、俺はシステムにダイレクトインターフェースされていた。いきなり視界がサラウンドビューに切り替わる。自分がふわっと宇宙に浮かん

だ感覚だ。

「BDI? おまえ、DI使ってたのか。無茶するな」

BDIつまり生体ダイレクトインターフェイスは、直接触れ合うことで、人同士がデータを共有できるものだ。今、ケンジはこれを通して美月のDIユニットを使ってシステムと繋がっている。これなら反応が遅れる心配はない。だが・・・

「今度磁気嵐を食らったら二人ともアウトだぞ」

「大丈夫、安全装置の減衰率を調整したからさっきくらいのレベルなら持つと思う」

いや、持つべきものはお金持ちの友人かもしれない。それと、美月の手の暖かみも伝わってくる。BDIで繋がった事で、俺の感覚はさらにとぎすまされている。なんとかなりそうな気がしてきた。

「よし行くぞ、油断するなよ」

「言われなくてもわかってるわよ!」

機体の降下率を少しずつ落としながら、ガイドマップのルートに向けて機体を乗せていく。宇宙機が大気圏に突入する際、最適な突入角というものがある。もちろん着陸する場合の話だが、角度が急すぎれば大気との摩擦が大きくなりすぎて機体が損傷し、最悪の場合空中分解して燃え尽きる。一方で角度が浅いと大気の抵抗を受けて、ちようど水面を飛ぶ石のようにまた大気圏外にはじき飛ばされる。今、俺たちがやろうとしているのは、どちらかと言えば後者に近い。だが、十分な速度がないため、このままでは、やがて失速する。そこで、スペースポールの宇宙機射出指向性磁場を使って加速しようという作戦だ。だが、これは精密な操縦を要求される。うまく磁場とシンクロできなければ、逆に抵抗を受けて機体が損傷してしまうからだ。なので、ガイドマップの指示に沿ってきちんと軌道を維持しなければならない。

「よし、もう少しだ。最後に一度だけエンジンを使うぞ。カウントダウンするから、ゼロカウントで5秒だけ噴射しろ」

「わかった!」

視野に重なっているパラメータ表示の右側に大きな数字で10が表示され、カウントダウン

が始まる。このタイミングをはずしたら一卷の終わりだ。たのむぜ、美月。

「よし、今だ！」

ガクツと衝撃があつて身体がシートに押しつけられる。そのタイミングでケンジは機首を上げて、上向きの放物線を描いている指向性磁場の表示に機体を乗せていく。

「よし、磁場をシンクロさせるぞ」

「いいわ、エンジン、停止」

ピツと電子音。視野の中央に青い矢印マークが表示されそれが点滅をはじめた。

「やった。うまくいったぞ」

「うまく加速してるわ。でも、このあとどうするのよ？」

そう、それが問題だ。とりあえず軌道には戻るが、その後の事は、正直に言えばまったく考えていない。

「そ、それはこれから考える」

「え？ なによあんだ、考えてなかったの。バカじゃないの。それじゃまた同じ事の繰り返しじゃないのよ」

いや、美月の言うとおりだ。この軌道では停泊できるステーションはない。近場の加速ステーションでトランスファー軌道に乗せてもらい、一気に静止軌道の高さまで行くしかないわけだ。しばらくの沈黙。とりあえず、機体を微調整して軌道に乗せるのが先だ。でもって、なんとか軌道に乗せたところで、通信が入ってきた。

「シャトル34便、聞いているか。こちらアカカマコントロール。レベル1軌道に乗った事をこちらでも確認した。このあと誘導が必要なら、セクター4Lコントロールにコンタクトしてくれ。こちらから情報を引き継いでおく。チャンネルは234Aだ。磁気嵐の影響で一般回線が混乱しているので、こちらの非常回線を使ってくれ」

助かった。地上管制はちゃんと追いかけてくれていたようだ。



「了解。こちら34便。支援を感謝する。チャンネル234A、セクター4Lにコンタクト」

通信機を指定されたチャンネルに合わせる。地球周辺の軌道は、緯度、経度でそれぞれ区切ったセクターと呼ばれる領域に分けられている。さらに、その高度により、L、M、H、Uの4レベルに分けられていて、それぞれに担当の管制がある。セクター4Lはアフリカ北部から中央アジアにかけて領域のレベル1軌道面周辺エリアである。

「4Lコントロール、こちらシャトル34便。緊急事態への支援を要請する」

「シャトル34便。4Lコントロール。連絡は受けている。目的地は第6静止軌道ステーションでいいか？」

「こちら34便、目的地は第6ステーション。トランスファア軌道への投入を要請する」

「34便、了解した。現在、磁気嵐の影響でレベル1軌道面内の加速ステーションは、まだ使える状態にはない。現在の軌道を維持して待機せよ。そちらの軌道は低軌道セクターの各管制で引き継ぎながらモニターしている。加速ステーションの準備ができ次第優先的に誘導する」

「こちら34便了解した。ただ、こちらあまり長時間の軌道維持は困難だ。エンジン燃料が残り少ないので、加速ステーションとのランデブーと静止軌道への移行に余裕を残しておくたい」

「34便、了解だ。こちら出来る限りの事をする。なお、引き続き、中規模以上の磁気嵐の可能性がある。最低限の機能を残してセーフモードを維持する事を推奨する。ダイレクトインターフェイスの利用もできれば避けるほうがいいだろう」

「こちら34便、了解した。出来る限り、現在の軌道を維持する」

さて、とりあえず少し時間はできそうだ。この低軌道では僅かながら大気の抵抗があるので、時々、エンジンを使って速度を維持しなければいけないが、それくらいは大きな負担にはならない。もちろん、燃料が無くならない限りは・・・だが。

「よし、それじゃ、シートホールドを解除して、セーフモードに戻そう。負傷者の手当もしなきゃいけない。軌道の監視はリモートでもできるだろう」

「そうね。機長は大丈夫かしら。かなりショックが大きかったと思うから心配だわ」

「乗客にドクターがいるようだから、診てもらおう。他の負傷者も含めて緊急の手当が必要ならレスキューを要請しないといけないな。まあ、下も大混乱みたいだから難しいかもしれないけど」

俺は、アテンダントに連絡して状況を確認し、ドクターに機長のケアを依頼してもらった。

しばらくは美月と交代でキャビンの手伝いをしよう。軌道監視はアウトバンドでキャビンからでもできるから。

「ケンジ、ひとつ聞いていい？」

「なんだ。急に」

「あんた、私のインターフェイスからの情報、どうやってさばいたの。これまで情報共有かけた相手はみんなパニックってめちゃくちゃになったのに」

「俺にもわからん。でも、たまに、こういう事があるんだよな。他にはいないのか、美月と組んでそんな事が出来る奴が」

「そうね、一人だけいたわ。そいつと繋がっていると、インターフェイスからの情報がきちんとフィルタされて、必要な情報だけになるのよ。そいつも、あんたと同じように、……」

「同じように、って」

「なんでもないわ。忘れて」

「なんだよ、そこまで言ったら気になるじゃないか。話せよ」

「うるさいわね、なんでもないっつらなんでもないのよ！」

美月はふくれっ面をして俺をにらみつけた。

「そういえば、あんた」

「なんだよ？」

「いつ私のことを美月とか呼び捨てにしているって言ったかしらね？」

「え、それは……その」

おいおい、お前だつて俺のことをケンジとか言ってるくせに。流れでそういう事になってしまつていたのは確かだが。

「まあ、いいわ。今回の努力に免じて許してあげるわよ。ケンジ。そのかわり、これからも私をバックアップするのよ。いいわね」

「バックアップって、いったい何すりゃいいんだ」

「何でもよ。私が手伝って欲しいときに、何でも手伝ってくれればいいわ」

おいおい、俺は奴隷か、下僕か、犬か？ こいつちょっと調子に乗りすぎだ。ここで甘い顔したらつけあがるに違いない。俺はちょっと咳払いして、美月の目を見据えて一言言おうとした。で、気がついたわけだ。まだ手を繋いでるって。俺の視線で美月も気づいたようで、

「あ、あんた、いつまで人の手を握ってるのよ。この変態っ!」

って、いきなり俺の手を振り払ったものだから、インターフェイスが突然ブチ切れてしまつて、一瞬、俺は目の前が真っ暗になった。すぐに、アウトバンドが接続をバックアップしてくれたので、大事にはならなかったけど、いったい何考えてるんだこの女は……。

「おい、いきなり接続切るなよ。危ないじゃないか!」

「うるさいうるさい、この変態っ。あんたがいつまでも私の手を握ってる……から……」

ちよつとトーンダウンした美月は、少しバツが悪そうに目を伏せた。思わず、ちよつと可愛いかもなどと思つてしまった俺は、もしかしたら一生後悔するのかもしれない。

「いいから、さつさとキャビン手伝つてきなさいよ。ここは、私が見てるから」

「わかつたよ、じゃ、たのむな。一応俺も繋がったままにしとくから。何かあったら呼んでくれ。それから、お前もD Iはしばらく切れ。軌道上では必要ないだろ」

俺は、キャビンから来たドクターと入れ違いにキャビンに出て、アテンダントの手伝いをはじめた。しかし、あの感覚はなんだつたんだろう。ゲームの時、それから試験の時、そして今回、またこの感覚を味わつた。自分の知識や経験が一気に広がつたような感覚、とぎすまされた知覚、不思議だ。普段の自分とはまったく違う自分が、どこかにいるみたいだ。そういうえば、あいつもう一人そういう奴がいるとか言つてたな。俺は、そいつがどんな奴なのかちよつと気になつた。美月のカレシか元カレとかなんかだろうか。ま、俺には関係ないが。



幸い、キャビンの乗客のほうはそれほどひどい状態にはないようだ。全員、意識は取り戻したようだが、しばらくは安静が必要だと診ていたドクターは言っている。まあ、セーフモードで重力もないから、リラックスするにはちよつどいい。もちろん、これ以上何か起きなければ……だが。乗客をシートに固定するのをひととおり手伝つてから、操縦室に戻りがけ、出てきたさつきのドクターとあつた。

「ちよつといいかな?」

ドクターが声をかけてきた。

「機長と副操縦士だが、今のところ意識がないだけで命には別状なさそうだ。だが、神経が損傷を受けている可能性が高いから、早めの治療が必要だろうね。このあと第6ステーションに着くまでどれくらいかかりそうだね」

「それが、加速ステーションが全部止まっていて、この軌道にしばらく足止めされそうなんですよ」

「そうか、できれば、24時間以内には治療したいのだが。それを過ぎると後遺症が残る可能性が高くなるからね」

「わかりました。管制と話をして状況を確認します。見通しがわかれば連絡します」

「よろしくたのむよ」

さて、とはいってもこれは運だのみになるかもしれない。とりあえず、管制には状況を入れておこう。

「キャビンは、どう？」

操縦室に入るなり、美月が聞く。

「ああ、キャビンのほうは大丈夫だ。問題はここ二人だな」

「そうね。ドクターに聞いた？」

「ああ、あんまりゆっくりしている暇はなさそうだ。とりあえず管制に話しておこう」

「それなら、もう連絡はしてある。でも、まだ大きな磁気嵐の可能性があつて、加速ステーションのほうでは、今は様子見だつて。一応、24時間がリミットだとは伝えてあるから、どれかひとつでもステーションを復旧できないか相談するつて」

「そうか。それじゃ、連絡を待つしかないな。ちよつと行つてドクターにも状況を伝えておこう」

俺はキャビンに戻つて、ドクターに状況を伝え、それからアテンダントにちよつとした食べ物とコーヒーをたのんでから。また操縦室に戻つた。

「あんたも、ちよつと一休みしなさいよ。まだまだこの先どうなるかもわからないだし」

そのとおりで。騒動の種はまだたくさんある。今のうちに少しゆっくりしておこう。俺は、

操縦席に身体を固定すると、アテンダントのおねーさんが持ってきてくれた、無重力用バックに入ったコーヒーを口にした。無重力状態では熱い飲み物は危険なので出せない。なまぬるいコーヒーで我慢するしかないのが残念なのが。

「ひどい味よね、このコーヒー」

美月がつぶやく。

「しかたないだろ。この状態じゃ、飲めるだけ感謝だぜ」

「ふん、綺麗なアテンダントさんが持ってきてくれたから？ あんた、さつきすごい目つきがエロかったわよ」

「うるせーな、健全な男子は綺麗なおねーさんにはそうなるんだよ」

「まったくこれだから男は・・・。あんたも一緒ね、他の男どもと」

なんだ、お前には関係ないだろ。なんで、そんなところで絡んでくるかな、こいつ。

「そりやそうと、お前、なんでそんなにオプシヨンのコンポーネントをたくさん持つてるんだ。かえって扱いに困らないか」

「パパの趣味なのよね、これ。もしかしたら実験台つてやつかもしれないわ。私のパパは、遺伝子工学者だから。あんたも名前くらいは知ってるんじゃない？」

遺伝子工学者つて、そういうえば、こいつの名前は星野美月・ガブリエル・・・。え、あのアンリ・ガブリエルの娘なのか。

「じゃ、もしかして、アンリ・ガブリエルの・・・」

「そうよ。アンリ・ガブリエルは私のパパ。ママは星野美空、やっぱり遺伝子工学者よ。パパほど有名じゃないけどね」

しかし、二人がかりで自分たちの娘を実験台にするつてもひどい話だが。

「色々詰め込んでくれただけじゃなくて、正体不明のコンポーネントもいくつかあるのよ。お前が大人になったらわかるよ、とか言っただけ教えてくれないのよ。ひどいと思わない？」

「でも、宇宙機のほとんど全部のシステムにインターフェイスできてしまうつてのは、すごいと思うけどな」

「あんたもさつき見たでしよ。情報の洪水よ。入ってくる情報が多すぎて、うまく整理できないのよ。あんたは例外中の例外。私と情報共有した相手は、だいたいパニックを起こしてしまつて共倒れ。中学で他の連中から私がなんて呼ばれてたか知ってる？ 疫病神よ、疫病神。ひどいと思わない？」

なるほど疫病神か。わからんでもないが、そりやちょっとかわいそうだ。まあ、俺ならば小悪魔程度にしておくのだが。

「なにニヤニヤしてんのよ、あんたも疫病神・・・とか思ってたんじゃないでしょうね」

「いやいや、そりやひどいな〜ってね」

「なによ、視線が泳いでるじゃない。やっぱり疫病神だつて思ってるんでしょ！」

美月はふくれっ面で俺をにらみつける。この表情が可愛いのだが。いや、いかんいかん、やっぱりこいつは悪魔に違いない。俺を契約者にして食い殺すつもりなのだ。

「疫病神なんて、とんでもない。小悪魔くらいかな〜なんてね」

「どっちでも似たようなものじゃない。今度言ったら呪い殺すわよ！」

いやいや、俺にとって小悪魔は、どちらかといえば魅力的な対象なのだけどね。たしかに命取りになりかねないのはどちらも同じだが。

「でも、それって訓練でうまく使いこなせるようにはならないのか？」

「私もそう思つて頑張つたわ。でもね、どうやら私の神経系の処理能力を超えてるらしくて、どうしてもうまくいかないのよ。やっぱり、私は失敗作ね」

美月はちよつと顔を曇らせた。ここは男子としてちよつと励ましてやらねばなるまい。

「そんな事はないだろ。現に、ここまで結構うまくやれてるじゃないか」

「それは、あんたが・・・。だ、だから、あ、あんたは、ずっと私のバックアップをするのよ。いいわねっ！」

おいおい、またいきなりそこへ行くのか。だから、俺はお前の下僕じゃねえつてば。そもそも、俺だつてマグレみたいなものなんだから、あれは。

「あれは、たまたまだ。そうそういつも出来る訳じゃないって」

「嘘よ。今まで、一人を除いて誰もあんな事は出来なかった」

「だったらその一人に頼めよ」

「頼めれば、誰もこんな事は言わない」

また美月は顔を曇らせる。どうやらこのあたりはあまり突っ込まない方がよさそうだな。

「ところで、美月、お前どうして附属高に行こうと思ったわけ？」

と、俺は話題を変えてみる。

「地上を、離れたかったのよ。あんまりいい思い出もないしね。それと、空を飛んでみたかったからかな。鳥みたいに」

ほお、結構。乙女なところもあるじゃないか、こいつ。

「あ、今、柄にもないか思ったでしょ！」

「いやいや、思っていないって」

「嘘、間違いなくそんな顔してたわよ、あんた。私にはお見通しなんだからね」

「たしかに、ちよつと意外ではあったけど、柄とかそんなじゃなくてさ・・・」

「同じ事じゃない。あんたなんかに言った私がバカだったわ。で、あんたはどうなのよ」

「どうって？」

「だから、なぜ附属高に入ったの？」

「俺は、ただ星を見ていて、あそこに行きたい・・・と思ったから」

それを聞いた美月は、あからさまに吹いて笑い転げる。

「おい、人にさんざん言っておいて、お前こそ、今、柄じゃねえとか思ってるだろ」

「思ってるに決まってるじゃない。なに？ それ、星を見て、あそこに行きたい？ あははは、笑えるわ。ケンジのくせに」

その、ケンジのくせに、ってなんだよ、いったい。

「悪かったな。ケンジで」

って、もう話が支離滅裂になってるじゃないか。やっぱ、こいつとはまともな会話にならないな。



さて、そんな感じで、しばし、まったりと時間が流れていったのだが、その平穩は、地上管制からの通信で破られた。

「シャトル34便、聞こえるか。こちらはセクター8Lコントロールだ」

「セクター8L、こちら34便、聞こえている」

ケンジがすかさず応答する。

「いい知らせと悪い知らせだ。現在のところ復旧が最も早そうな加速ステーションは、極軌道ステーションCで、あと30分もあれば稼働できる見込みだ。そちらの軌道だと、ランデブーは2時間後になる。もうひとつは悪い知らせだ。L1の観測衛星が、太陽嵐が強まる兆候を検出している。現在解析中だが、大きいのがくると磁気嵐が発生して、また全部、最初からやりなおしになる可能性が高い。以上だ」

「こちら34便、状況は了解した。たぶん、もう一度きたらこちらはアウトだ。来ない事を祈るしかないが」

「34便、詳細な状況がわかり次第連絡する。こちらも幸運を祈っている」

一難去ってまた一難か。加速ステーションにランデブーして軌道変更できるまえに磁気嵐を食らったらこんどこそおしまいだ。機長たちの手当どころか、軌道を維持するための燃料だって持つかどうか。運を天にまかせるしかないさそうだ。

「厳しいわね。L1で太陽嵐が検知されてから、それが地球の磁気圏にぶつかるまでに、およそ1時間しかないのよ。だから、これから1時間が勝負ね。その間に大きなのが来たら、アウトだわ。ランデブーまでには2時間。それまでに磁気嵐が来れば、加速ステーションはまた再起動しなきゃいけない。次のランデブーだって、いつになるかわからないから」

「そうだな。幸運を祈るしかないさそうだ。」



重苦しい時間が流れる。とりあえず加速ステーションを使ってトランスファー軌道に入ってしまえば、とりあえずシステムをセーフモードにして、磁気嵐をやりすごせる。近地点が低軌道上部、遠地点が静止軌道という長楕円軌道であるトランスファー軌道なら、軌道維持のための燃料も不要だ。だが、もしそれができないと、軌道維持のために使う燃料が底をついて、今度こそ大気圏で燃え尽きる羽目になる。視野内の計器パネルに表示されるランデブーまでの残り時間のカウントダウンがなんとなくゆっくりに感じるのは、そんな気持ちの焦りからなのだろう。もちろん、焦ってもどうしようもないのだが。

「時計の進みが遅く感じない？」

「ああ、そうだな。どんどん遅くなっていくような気がする」

やはり美月も同じ事を感じていたようだ。まあ、こいつは鉄砲玉みたいだから、こんなまな板の上の鯉みたいな状態は好きじゃないだろうな。俺だって得意じゃないが、下手に焦っても状況が変わるわけじゃない。それどころか、ミスでも犯せば命取りだ。ここは腹をくくるしかないだろう。俺は、目を閉じて深呼吸する。

「あんた、余裕じゃない。ケンジのくせに生意氣！」

「はあ？ この期に及んで腹くくるしかないだろうが。それに、なんだよケンジのくせに、つてのは」

「だから、ケンジのくせに、なに余裕かましてるわけ。人生悟っちゃったって感じよね。私は違う、まだやりたい事がいっぱい。こんな所で最後になんか、なりたくない」

「そりゃ、俺だって同じだ。でも、ここで焦ってひとつでもミスったら、それこそ命取りだ。お前も深呼吸でもしろって」

「まったく、生意気だわ。ケンジのくせに・・・」

美月はうつむき加減で言い放つと目を閉じて深呼吸する。

「そうそう。素直でよろしい！」

「バカっ！」

俺のほつぺたに美月のパンチが飛んできた。でも、今は無重力下だ。シートベルトをしているとはいえ、体が不安定な状態で急激な動きをすれば、その反動がくる。俺も美月もバランスを崩しかける。

「いてっ、何すんだよ。危ないだろ」

「うるさいうるさいうるさい！バカ、バカ！！」

まったく凶暴な奴だ。あんまりこいつを刺激しないほうがいいかもしれんな。

「あんた、怖くないの？」

「そりゃ、俺だって怖いさ。この状況で怖くない奴なんていないだろ。でも、それに負けちゃおしまいだ。だから・・・」

「そうね・・・ごめん。あんたがいなきゃ、私・・・」

そう言いかけて、美月は不意に黙り込んでうつむく。

「晴れの入学式を前に、こんな事になるなんてな。ついてないよな、俺たちも。でも、美月がいるおかげで、俺もなんとかかなりそんな気がしてる」

美月は俺を見て、ちょっと赤面して小声で言った。

「バカ・・・ケンジのくせに」

どうやら、こいつは、このフレーズを気にしてしまったらしい。困ったものだ。まったく意味不明なんだが。

「シャトル34便、聞こえるか。こちらセクター2Lコントロール」

「セクター2L、こちら34便。聞こえている」

「極軌道ステーションCの準備が完了した。ランデブーまであと1時間20分だ」

「こちら34便、了解した」

あと20分だけ、何も起きないでいてくれれば、なんとかなる。俺は祈るような気持ちだった。

「あと20分の我慢ね。20分だけL1で太陽嵐が検知されなければ・・・」

「そうだな。ここは美月の日ごろの行いにかけるか」

「だったら、大丈夫よ。歩く品行方正の私にまかせなさい！」

いいのか、そんな事を言って……。俺が口に出す前に通信が入る。

「シャトル34便、こちらセクター2Lコントロール。ちょっと悪い知らせだ」

ほら、言わんこつちやない……。おまえが品行方正だったら、世の中の女子はみんな聖女だつて。

「こちら34便。どうした、教えてくれ」

「L1の観測衛星が荷電粒子のサージを検出した。かなり大きな太陽嵐だ。約1時間で磁気嵐がくる。極軌道ステーションCとのランデブーは中止せざるをえないが、どうする？」

どうする、と聞かれても困る。つまりは望みを捨てろという事じゃないか。

「こちら34便、ぎりぎり、ステーションを稼働させたとして、あとどれくらい持つ？」

「ステーションをセーフモードにするのに10分はかかるから、あと50分が限界だ。ランデブーまでにはまだ1時間10分かかるから、間に合わない。気の毒だが」

そんな事はわかっている。こつちは、ほかに手がないか考え中だ。考えろ、ケンジ、なにか手があるはずだ。

「ねえ、ショートカットできないかな？」

美月が言う。しかし、ショートカットしても……。ん、まてよ。そうか。

「やってみるしかなさそうだな」

「セクター2Lコントロール、こちら34便。50分でいい、ステーションを待機させてくれ、それでだめなら仕方がない」

「34便、どうするつもりだ……。いや、了解した。幸運を」

そう、向こうだつて分かっているさ。たぶんもう駄目だろうって。でも、まだ諦めきれんのだよ、俺たちは。

「美月、セーフモード解除だ。乗客とアテンダントにシートに戻るように言ってくれ」

「わかったわ。セーフモード解除。システム再起動！」

さて、ショートカット、つまりは文字通り近道をしようというわけだ。俺は、フライトコンピュータにいくつかのパラメータを叩き込んだ。結果はすぐ出た。視野上にガイドマップが表示される。軌道変更開始まで30秒、ステーション到達まで40分、加速時間をいれてぎりぎりだ。躊躇している時間はない。

「美月、いくぞ！」

「わかった。ほら、ケンジ」

美月が左手を出す。俺は、それをしっかりと握った。視野がサウンドビューに切り替わる。

「10秒前、9、8・・・、美月、ゼロカウントでエンジン噴射だ！」

「了解、2、1、噴射！」

衝撃があつて、ぐっと機体が加速する。さて、俺たちがやろうとしている事、それは文字通りのショートカットである。軌道上で単に加速しても、それは機体を地球から遠ざける事になり、時間は短縮できない。時間を短縮するには一旦軌道を下げないといけないわけだ。しかし、この低軌道でそれは、また大気圏に突っ込む事を意味する。つまり、さっきやった事と同じ、大気上層で飛び石のように跳ねて、また軌道にもどるといふ離れ業だ。しかも、今度は地上からの指向性磁場の助けはない。なので、ここから加速して勢いよく大気上層ではねてからエンジンをもうひと吹きして軌道にもどる事になる。

「加速完了、エンジン、アイドリング」

「よし、コースに乗った。あとは、大気突入角度を調整して・・・よし！」

これで、大気圏を一瞬通過するまで、運にまかせるしかない。もし、何か不測の事態が起きたらそれで終わりだ。

「ケンジ、ありがとね」

美月が俺をみて言う。だが、礼はうまくいってから言ってくれ。俺は、黙って美月の手を握り返す。機体が小刻みに揺れはじめ、うっすらとしたプラズマに包まれる。大気上層に突入したのだ。あとは、上手く浮き上がってくれば・・・。

「美月、エンジンスタンバイ」

「了解。スタンバイ。いつでもいいわよ」

どうやらコースは正常、大気圏に沈むでもなく上層をかすめて飛んでいる。そして、ふっと振動が消える。

「よし、出たぞ、カウント10でエンジン噴射を1分だ。カウントダウン開。」

「了解、カウントゼロでエンジン1分ね。・・・3, 2, 1、噴射！」

また加速感があつて、軌道が上がっていく、これならなんとかかなりそうだが・・・、実は気がかりがひとつ。

「噴射終了まであと10秒・・・3, 2, 1、停止。エンジン、アイドリング」

ここまでは上出来だ。でも、この先、もうひとつ難関が残っている。

「ケンジ、速度超過じゃないの？」

美月が言う。そうだ、この速度は通常のランデブー速度よりもかなり速い。それだけ、加速ステーションの加速磁場とのシンクロが難しいって事だ。

「そうだ、織り込み済みだけど、この先、もうひと頑張りしないとな」

「そうね。これしか手がないんだから」

加速磁場に乗り損ねたら、何処へ飛んでいくかわからない。だが結果はわかっている。一旦上がってから今度はまた大気圏にまっさかさまだ。

「セクター4Lコントロール、こちら34便、戻ってきた。聞こえるか？」

「34便、こちらセクター4Lコントロール、なんて奴だ。無茶しやがる。機体は無事か？」

「こちら34便、ちょっと揺れたが無事だ。これからがまた大仕事だが。極軌道ステーションCの状況はどうだ？」

「34便、首を長くして待っている。あと5分ほどで通信可能になるはずだ。ぎりぎりだぞ。それに、かなり速度超過だ。大丈夫か？ いや、それは愚問だな。幸運を祈る！」

そうさ、愚問中の愚問だ。こっちはやるしかないんだからな。

「了解。なんとかやってみる」

アタカマの指向性磁場もそうだったが、今度はさらに難易度が高い。幸いにも、フライトコンピュータの助けがあるが、そもそも、こんな軌道は設計の想定外だから、何が起きるかわからないってのが、正直なところだ。

「大丈夫、できるわ。きっと」

「そうだな。できるさ。俺たちなら」

もう何年も組んでる相方、そんな気がしてきた。本当にこいつとだったらできそうさ。さて、そろそろショータイムだが。

「ステーションCアプローチ、こちら34便。聞こえるか」

「こちら極軌道加速ステーションC、待ってたぞ、34便」

「こちら34便、わかっていると思うが、こちらの速度はかなり速い。そちらのアシストが必要だ」

「34便、了解している。できるだけだけの事はするが、後はそっちの腕任せだ。磁場の調整は30%が限界だ。しかも、今の軌道からトランスファー軌道への遷移は、かなり余裕が少ない。そちらのエンジンを併用する必要がある」

「了解、燃料が心もとないが、やってみる」

さて、そうは言ったが、実際のところ、静止軌道への遷移を考えると、使える燃料はもうほとんどない。いちかばちかだが。

「燃料、厳しいわね」

「でも、まずはこの軌道から抜けないことにはな。先の事はそれから考えよう」

「そういうところがケンジなのよね。まあ、今回は私も同意せざるを得ないけど」

おいおい、今度のケンジはどういう意味だ。そんなに活用形が多いのか、俺の名前は。と、そんな事を言っている場合じゃないが。

「34便、こちらの準備は完了した。ガイドマップを送る」

「34便、了解した。ガイドマップ受信した」

視野に、ガイドマップの軌道が表示される。見ただけで難しそうな軌道だ。

「美月、フライトコンピュータをセットしよう」

「了解、ガイドマップ情報に同調」

「もしかしたら、コンピュータの安全設計限界を超えるかもしれない。そのときはマニュアルバライドが必要だ。注意していてくれ。俺はコースを見るから、そっちはエンジン出力の調整をたのむ」

「わかったわ」

「よし、あと3分」

さて、これ以上、何も起きないでくれ、と祈らざるをえない。だが、そういう時に限って問題は起きるのが常で。

「シャトル34便、ちょっと悪い知らせだ」

そらきた、またか。今度はなんだ。

「こちら34便、あまり聞きたくはないが、どういう事だ？」

「そろそろ磁気嵐の兆候が始めた。予想より、少し早い。加速には5分ほど必要だが、磁気嵐によって安全装置が作動した場合、途中で加速が止まる可能性がある。悪く思わんでくれ、こちらも限界までやってみる」

「了解した。よろしくたのむ」

「幸運を祈る」

「ありがとう」

さて、どこまでも運命は俺たちに試練を突き付けたらしい。といっても、もう既に逆戻りはできないところまで追い込まれている。

「あんた、どこまで日頃の行い悪いのよ」

こいつ、自分の事を棚に上げて、よく言うぜ。

「それはお互い様だろ」

「今回の不運はきつと全部、あんたのせいにはちがいないわ。でも、私がいるから大丈夫。任せなさい」

「おいおい、さつきもそんな事を言った直後に問題が起きたんだ。やめてくれよな。」

「では、幸運の女神様にお願ひするとしましょうか」

「バカ、ケンジのくせに」

「やれやれ、言うに困るとこのフレーズだ。完全にこいつの辞書には俺の名前がロクでもない意味で登録されてしまったらしい。でもまあ、どっちがどうでもいい。ここは一緒に乗り切るしかないのだから。」

「よし、加速磁場到達まであと30秒、準備はいいか？」

「OK, エンジンスタンバイ。自動制御にセット」

「よし、パラメータから目を離すなよ。もし、自動が切れたらすぐにマニュアルに切り替えるから」

「わかったわ。まかせなさい」

心強い一言だな。まあ、虚勢でも今はありがたい。マップ上で加速磁場の軌道がどんどん近づいてくる。

「よし、磁場に乗るぞ！」

ガクつと衝撃があつて、軌道表示が磁場の表示に重なる。加速が始まった。しかし、軌道は不安定だ。磁場とのシンクロはできているが、表示は黄色のまま。エンジンが小刻みに軌道を調整しはじめる。表示が一瞬グリーンに変わるが、また黄色に戻る。そのたびにエンジンが軌道を修正してグリーンに戻す。これを繰り返しながら、だんだん軌道は目標ラインに近づいていく。

「あと少しね。なんとかかなりそうだわ」

と、その瞬間だった。ガイドマップがぱつと消えた。加速磁場が止まったのだ。フライトコンピュータが自動的にリカバリーして、目標軌道を再表示し、エンジン出力をあげて、軌道に



戻そうとする。

「がんばれ、あと少しだ」

「だめよ、軌道が急すぎる。コンピュータが追従できないわ」

やはり、ちょっと厳しいか。早めにマニュアルに切り替えたほうがよさそうだ。急に自動操縦が切れるとパニックになる可能性がある。

「美月、マニュアルでいくぞ。いいか？」

「いいわ、ケンジ。エンジンはまかせなさい」

「オートパイロット解除。よし、今だ！」

俺は、操縦をマニュアルに切り変えた。そのとたん、目の前のパラメータ表示が、あちこちで黄色や赤に変わる。

「美月、フルスロットルだ。燃料は気にするな。ここで外したら後がない」

「やってるわ。そっちもコースははずさないで。この加速だとかなりきついわよ」

こりや、実際かなりきつい。燃料もぎりぎりだ。軌道は目標から僅かにずれた状態で、どうにか踏みとどまっている。その時、視界にざっとノイズが入る。やばい、磁気嵐だ。これがとどめか、どうにか踏ん張ってくれ。ここでDIは切れない。思わず美月とつないだ手に力が入る。

「大丈夫、これくらいならDIはなんとか持つから。あと一息がんばって」

これは特製のDIユニットをくれた美月の両親にも感謝しないとイケない。とにかく、燃料が続く限り、軌道を修正し続けなくては。燃料が持つ限りは……。だが突然、燃料ゲージが赤に変わる。

「燃料がリザーブに切り替わったわ。あと30秒しか持たな」

速度は、大丈夫だ、しかし、コースがまだ合っていない。姿勢制御用のスラスタでは限界がある。メインエンジンが切れたら、かなりきつい。

「あと10秒」

とりあえず、こうなったらスラスタも全開だ。それで駄目ならしかたがない。

「エンジン停止。燃料切れよ」

「もう少し・・・、だめか・・・」

これまで響いていたエンジンの音が途切れて、急に静寂が訪れた。万事窮す・・・か。